〔在外研究記〕

在外研究のススメ（2022 年度ロンドン在外研究体験記）

岡本 紀明
Noriaki Okamoto
（立教大学・経営学部・教授）
（Rikkyo University・College of Business・Professor）

「岡本先生，来年度に 1 年間サバティカル（研究休暇）を取れますが，どうされますか」。過去のメールのやり取りを振り返ると，当時の学部長からこの連絡をもらったのは，2021 年の 7 月 10 日であった。この時期はまだコロナ禍の只中で，ほぼ全ての講義がオンラインで行なわれていた。基本的にサバティカルは 6 年間真面目に働いた自分の成果であるため，その取得自体は希望していたが，2022 年 4 月からの取得には迷うところがあった。というのも，本学の制度では一定年齢までサバティカル中に「在外研究」を申請することができ，承認されれば在任中 2 回までに限り，手厚い金銭的補助のもと海外で研究生活を行なうことできる。つまり，当時はコロナ禍がいつ収束するか不透明であり，サバティカル中の在外研究を希望する場合，平時より様々な面倒や制約に直面するのが明らかだったため，躊躇していたのである。

学部長からの質問には，「サバティカルについては是非 2022 年度から取得したいと思います。ただ，在外研究についてはどうするか検討させて下さい」と取り急ぎ返答した。コロナがその先どうなるかわからなかったが，せっかくめぐってきたサバティカルの権利行使を先延ばしにして，その後いつ行使できるか不安だった点も判断に影響した。その後は在外研究制度の詳細について調べ，本当にどうするか悩んだ。国内でサバティカル生活を満喫して，気が向いたら全国の温泉めぐりでもした方が，余計な苦労もせずよっぽど快適に過ごせるのではないかと思う時期もあった。しかしながら，拙いながらも英語で会計を教えており，かつ学科の学生に留学を強く薦めている立場を考慮すれば，せっかくの在外研究の機会を手放すのは，日頃の行いと矛盾する気がして後ろめたく感じた。また，この在外研究の機会を通じて，研究者としてさらに一段階成長したいと思うところもあった。その一方，家族（妻と小学生の子供二人）の同行を望んでいたため説得する必要があり，結果として，結論を出すまで多少の時間を要した。

まず制度上，在外研究を申請する場合，何はともあれ，事前に海外の大学からの承認と正式な招聘状が必要になる。これはビザ申請や入国時の審査および各種手続きにも極めて重要な役割を果たした。私はこれまで主に定性的かつ学際的な会計研究を行なってきたため，基本的にはそういった研究が盛んな英語圏の国を考えていた。在外研究中の研究テーマとしては，それまでの研究の継続というよりは，その蓄積を生かして新たな課題に取り組もうと考えていた。そこで特に個人的に関心を持ち，さらに海外で基準や実務が先行していた「社会的インパクトの会計」に絞ってプロポーザルをまとめ，これまでの研究成果や経歴をまとめた CV を英語で作成し，受け入れを希望する大学に送り，打診してみることにした。

結果は予想以上に厳しかった。まず長年の友人が勤務する英国のグラスゴー大学に受け入れ可否を尋ねたが，コロナの影響で長期の在外研究員を受け入れていない（博士課程の学生は除く）とあっさり断られた。やや距離的に近いオーストラリアでも，社会的インパクトの研究が盛んな大学に受け入れを問い合わせたところ，オーストラリア自体，その時点で在外研究目的での他国からの入国を認めていないとの返答であった。その後，イギリスの有力大学であるオックスフォード大学やロンドン・キングス・カレッジ，学際的研究の

メッカでもあるロンドンスクールオブエコノミクス（LSE）にも同様の連絡をしたが，前者 2 校からは丁重なお断りのお返事をもらい，LSE に至っては長いこと返信すら無かった。

気持ちは折れかけていたが，まだ諦めるのは早いと感じ，社会的インパクトを貨幣数値で測定するインパクト加重会計という斬新な研究プロジェクトを立ち上げて体系的な研究を進めていたハーバード・ビジネススクール（HBS）にも在外研究の可能性があるか尋ねてみた。その結果，研究プロジェクトの 1 人で会計学者でもあるイーサン・ローエン氏が興味を持ってくれ，一度オンライン・ミーティングで話を聞きたいとの返答があった。ほぼ在外研究を諦めかけていたところに一縷の望みが見えたため，このミーティングには真剣な準備をして臨んだ。事前に英語の想定質問集を準備し，在外研究の熱意を伝えることができるよう何度もシミュレーションした。ミーティングは Zoom を通じて一対一で行われ，ローエン氏の温厚な人柄と準備の成果もあり，面談自体は和やかに進んだ。その後，HBS から連絡があり，研究プロジェクト代表のジョージ・セラフェイム教授も前向きであるため，ボストンでの在外研究はうまく進みそうだと伝えられた。これで在外研究先がなんとか決まるのではとホッとしたが，この直後に想定外の事態が生じた。

長いこと返信がなかった LSE のアンドレア・メニケン教授からメールが届き，「長いこと連絡が遅くなり申し訳ない。あなたのプロポーザルと CV を拝見し，同僚のマイケル・パワーとピーター・ミラーとも相談していて，問題なければ，今度の教授会で在外研究受け入れが承認される予定です」との内容であった。このメールを受け取った時，率直に嬉しかった記憶はあるが，同時に憂鬱な気分にもなった。即座にどちらかを選択し，もう一方には断りの連絡をする必要があったからである。

しかしながら，自分の腹は決まっていた。LSE である。インパクト加重会計というテーマ自体には魅力を感じていたが，受入教員となり，最も交流があり得ると想定された HBS のイーサン・ローエン氏は，トップジャーナル至上主義の米国会計学会でのし上がったデータ重視の実証研究者である。私のこれまでの（乏しい）研究蓄積や知識では，話が噛み合わない，もしくは主張が異なる点も大いに懸念された。米国流を一から学ぶということも考えたが，在外研究が 1 年限りであることと自分の年齢を考えたら，それはやや非現実な選択とも思えた。

結果として，HBS へは正直に伝えて丁重なお断りの連絡をし，ロンドンでの在外研究が 2022 年 4 月からスタートした。コロナ禍と円安が重なり，渡英して不動産を内覧することは困難となり，全てオンラインで物件を探し，LSE に一本で通えるセントラルライン（地下鉄）のノースアクトン駅周辺の物件に決めた。ちなみに，英国では居住人数によって部屋数や建物の大きさが法的に定められている。私を含めて 4 人家族（プラス愛犬 1 匹も）で渡英することになったため，円安ポンド高にもかかわらず，それなりに大きなフラットに住むことになり，相当高い家賃を払うことになった（海外からの居住者は半年分の家賃を先払いする義務もあった）。

幸運にも大学の研究室に関しては，LSE の最も新しい建物であるマーシャル・ビルディングに会計デパートメントが移ったため，その 4 階（Level 3）の共同研究室（2 人部屋）が割り当てられた。デスクには PC と本棚が備え付けられてあり，ベンチフィー（在外研究先や大学に支払う利用料）なしで快適な研究環境を得られたのは，本当に有り難かった。ちなみにもう一方のデスクには，期間やセメスターごとに様々な方が短期で入れ替わり在籍し，夏期休業期間中にはキース・ロブソン（元 AOS 誌チーフエディター）がいらっしゃったこともあり，貴重なコミュニケーションの機会が得られた。

さて，在外研究期間中の成果であるが，そうそうすぐに出るものではない（私の場合だけかもしれないが…）。LSE でもそうであったが，客員研究員（visiting scholar）は基本的には一人前の研究者として扱われるので，大学院生とは異なり，受入教員も何か特に用事がない限り，そこまで積極的に声をかけて，研究をサ

ポートしてくれることはない。私にとって今回は人生２度目の在外研究であったため，その点は重々承知していた。ただ渡英後最初の１ヶ月は，気分が高揚していたためか，研究に関しては消極的で研究室に出向くのも頻繁ではなかったように思う。しかし，2022 年５月，LSE 名誉教授であるリチャード・マクビー氏から突然メールをもらい，研究室で話をしようとお誘いを受けた。大学院生時代から様々な論文や書籍を通じてお名前を存じ上げており，直接話すことができて本当に光栄であった。またマクビー氏は私の話を色々と聞いた上で，「もっと積極的に動きなさい。そうすれば君の在外研究は素晴らしいものになるだろう」と厳しい口調で強烈なメッセージを残して下さった。その後は改心し，研究室にも頻繁に足を運ぶようになった。LSE で主催されていた各種の会計研究セミナーや，英国内外で開催されていた学会や研究会にも積極的に参加し，可能であれば自ら発表し，他者との交流にも力を入れた。主に博士課程の学生主体のセミナーにも顔を出したりした。

そのように積極的に動くことで見えてきた景色もあった。周知のように LSE は研究重視の大学であり，教員等のスタッフには顕著に優れた研究成果が求められる。英国内では学部単位で研究成果の評価が独立第三者機関により行なわれ，その結果が補助金等の多寡や志願者の動向に影響を与える。そのため，私が籍を置いていた会計デパートメントも助教ランク（assistant professor）の教員が多かったが，准教授に昇格するため，いわゆるトップジャーナルへの投稿・掲載を成し遂げなければというプレッシャーの中で研究を続けており，部外者でもその緊張感のようなものをひしひしと感じた。いわゆる「publish or perish」の文化である。これに関連して，滞在中には LSE で開催された AOS（*Accounting, Organizations and Society*）誌掲載を目指す小規模かつクローズドなセミナーにも参加させていただいたので，ここで言及したい。世界各国から集まった参加者は 30 人程度だったと思うが，その多くが AOS 誌の査読者を務めていた。セミナーでは，一つのペーパーに関する報告が 30 分程度に対し，２時間程の討論が設けられた。結果として，１日で報告機会を得られたのは３本のペーパーだけであった。それぞれに対して侃々諤々の議論が延々と繰り広げられ，例えばマイケル・パワーが「私が著者であれば，このペーパーの前半部分は論文の主旨と全く合致しないので大胆に削ぎ落として書き直す。なぜなら…」と率直に伝えていたのが印象に残っている。このような厳しいやり取りを経ないと，トップジャーナルの一角を占める AOS 誌への掲載には辿り着けないのだろうなと，何ともやるせない気持ちにもなったのを覚えている。

勿論，研究ばかりでは気が滅入るので，週末や子供の学校が休みの日は家族でレンタカーを借りて英国内を旅行した。南部の都市ブライトンを通って東のドーバーから西のウェールズまでの海岸沿いの景色や，リバプールやマンチェスターといった都市のロンドンとは異なる街の景色は今でも脳裏に焼き付いている。ロンドン自体も見所満載の刺激的な都市で色々なスポットをめぐったが，何よりも困ったのは，外食代が異様に高いことである。昨今，色々なメディアでも伝えられていると思うが，大体どこのお店でもランチ代は最低 15 ポンドを超えてくる。2022 年当時，1 ポンドが 160 円半ばを超えることが多く，その場合 1 食 2,500 円以上となる。さらにディナーに外食を選ぶ場合，その 2 倍以上にコストは跳ね上がる。それでも，大手スーパーを利用して自炊をする場合，意外にも英国ではパンや野菜・果物と肉類は日本よりも割安であり，その点では経済的に助かった。

以上，在外研究生活を振り返り雑多な内容を記したが，回想しても良い思い出しかない。特に暮らしてみて，ロンドンという都市が多様な移民を受け入れてきた懐の深さを感じた。これを言語化するとすれば，あまり他人のこと（見た目や肩書き，バックグラウンドなど）を気にせず，必要があれば誰とでもコミュニケーションをとり打ち解ける風習ではないかと思う。個人的にはこれは大変快く感じられた。さて，在外研究中の研究成果がどれほどあったのかと尋ねられると，甚だ心許ない。それでもそれなりに人脈は形成してきた

し，英語で自分の研究成果を発信したいという気持ちはさらに強くなった。今後の自分の成長に期待したい。最後に，この雑記を読んで下さっている主に若手の研究者に伝えたい。海外の大学で同じ興味や関心を抱く会計研究者や学生と長期間接するのは，国内では得がたい貴重な経験である。迷っているならば，是非，在外研究を薦めたい。生活や言語の壁など様々な困難に直面すると思うが，後から振り返れば全て成長の糧になる。むしろ，そういった困難を克服した先に，将来のグローバル会計学会を支える人材が形成されていくのではないだろうか。